

聴覚障害教育のコミュニケーション

I 聴覚法

- *きこえを回復する方法（補聴器・人工内耳）
今の自分の耳を上手に使う

II 口話法

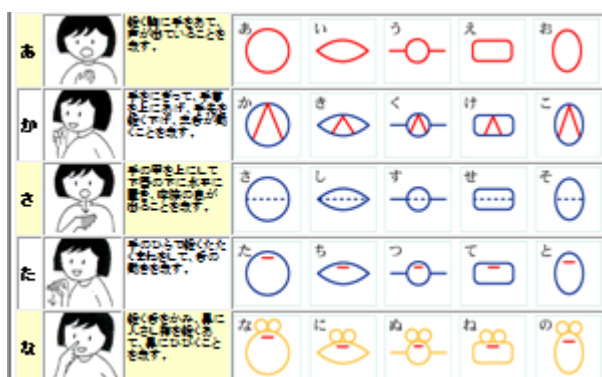
- *目で見て分かる方法
- ①読話—相手の口を見ながら、話の内容を読み取る
- ②発話—口の開け方や舌の使い方を見ながら声を出す

III キュードスピーチ

- *手がかりをつけた話し言葉で会話する方法
- ・日本語はすべて母音で終わるので、子音を手の形で表すと、50音をすべて表すことができる。

○聞こえない人にとって一番の不安感は、「自分の発音の評価は、他人がする」ということ。
自分で自分の発音の評価をすることができない・・・

(キュードスピーチ例)



○聴覚障害の能力評価は、「聞く・話す」→「読む・書く」に移ってきている。
しかし、聴覚障害者の読みの能力は高3で小5レベルである。
↓
ろう教育の方法のまずきではないか？

IV 手話付きスピーチ

- *話し言葉（音声言語）に合わせて、手話をつける。

V 日本手話

- *普通使う日本語とは異なった文法で、場所・空間を手話で表しながら話す。

VI 筆談

聴覚障害教育の現状と課題

- ① 聴覚障害教育専門性の継承・維持・発展
- ② 様々な教育の場に即した聴覚障害児の教育的ニーズに対応した適切な教育
- ③ コミュニケーション手段の選択と言語力・コミュニケーション能力及び学力の育成
- ④ 日本語の獲得に関わる指導法の確立
- ⑤ 障害の早期発見・早期診断に対応した教育的支援と関係機関連携の確立
- ⑥ 円滑な社会参加に向けた情報活用能力と自己実現の育成・支援
- ⑦ 障害理解（自己理解）に関する教育的支援のあり方

人事異動、新設、新担任・・・などで専門性がなかなか育まれない。

「ろう」を障害でなく「一つの文化」ととらえる。
「ろう者のやりかた」
「聴者のやりかた」